

# ロンドンパラリンピックへの道

Road to London 第 3 回 Paralympic Games

## 世界各国の障害者水泳事情

みなさんがオリンピックを最大の目標にするように、パラリンピックを目指し、日々、水泳に没頭する障害者スイマーがいます。同じ水泳に携わる仲間として、彼らを知り、そして少しでも親しみを持って応援できたら――。



今月は、障害者水泳を取り巻く世界と日本の現状を紹介します。

### 組織の違いが強化の差に

北京パラリンピックにおいて世界の強化体制との差をまざまざと見せつけられた日本。健常者同様、国を挙げた強化が急務とされていますが、オリンピックは文部科学省、パラリンピックは厚生労働省と管轄が異なることもあり、劇的な改善がされないまま、選手強化は関係者の努力によって支えられているのが現状です。2016年リオ大会の開催国であるブラジルや中国、ロシア、ウクライナ、マレーシア、イランなどは国を挙げて強化を進めており、これらの国の障害者アスリートが受け取る報奨金も充実しています。

日本の場合、組織面では、日本水泳連盟と身体・知的・聴覚等、各障害の組織が別々に存在していますが、豪州、英国、カナダなどは、それらがすべて同じ競技団体の中に存在しています。その代表格が豪州選手権で、五輪選考会の競技プログラムの中に、障害者のレースが組み込まれ

ている競技運営は、その象徴と言えるでしょう。

こういった動きは、国際競技団体（IF）の動向に大きく影響される傾向にあります。IFが健常者と障害者の組織を分けていない場合は、国内競技団体もそれにならうようになってきています。例えば、国際テニス連盟（ITF）は、その組織の中に車いす部門を含めており、ITF主催の4大会などは、車いす部門も同じ会場で日程をずらして行なわれています。前号で紹介したパラリンピック出場枠もITFから配分されています。水泳は、国際水泳連盟（FINA）がテニスのような体制をとっていないことも、健常者と障害者が統一された組織にない要因となっているのかもしれませんが。

また、多くの国では、ナショナルトレーニングセンターが障害者アスリートも使用できる設備・環境となっており、サポートも同様に受けられているようです。

### 大会運営を支える競技役員

障害者水泳の国際組織であるIPC Swimming（国際パラリンピック委

員会内にある水泳部門）ルールは、FINAルールが基本となり、そこに障害があるがゆえに不利にならないように配慮されたルールが上乘せされている形となっています。

多くの国では、競技を運営する競技役員は、泳法審判や折り返し審判に関係するルールだけでなく、障害のクラス分けに関する知識も勉強し、IPC Swimmingのルールを理解した上で競技会を運営しています。国内大会では、一般競技役員に「障害泳法担当」という日本身体障害者水泳連盟（JSFD）の競技役員が入るか、泳法審判の業務すべてをJSFDが行なう形で運営しています。

特に障害者水泳の泳法審判はその判断が難しいため、IPC Swimming認定の審判員となるには、英語での研修（実地研修含む）を受け試験に合格しなければならなかったりと、その人数を増やすことが難しいのが現状です。英国では、多くの一般競技役員がIPC Swimmingのクラス分けを勉強し、競技ルールを学び、障害者水泳大会の審判員を行ないながらロンドンパラリンピックに備えています。

### 今月のTopics ▶▶▶ 注目選手紹介

江島大佑 [イトマン京都所属]



えじまだいすけ  
1986年1月13日生まれ  
京都市出身  
障害名 / 脳梗塞による左片麻痺

3歳からイトマン京都で水泳を始め、12歳のとき練習中に脳梗塞で倒れた。しかし、「大好きな水泳を続けたい」と、6カ月におよぶ厳しいリハビリを経て、1年後に再びプールへ。復帰当初は、左半身が動かないことを頭と体で理解できず、フォームやタイミングを体得するのに苦労した。コーチや周りの力を借りて根気強く取り組み、18歳でアテネパラリンピックに初

出場。200mメドレーリレーで銀メダルを獲得した。以降、世界のレベルの高さとライバルの存在に自身を奮い立たせ成長する日々だ。

自身3度目の出場を目指し、現在もイトマン京都で練習を行っている。人一倍、緊張するが負けず嫌いの性格で、ロンドン大会では50mバタフライで個人種目初のメダル獲得を目指している。 文◎桜間裕子



得意のスタートから先行逃げ切りが勝利の鉄則